

# 第1学年生活科実践事例

## 「てづくりおもちゃで あそぼう」(幼小連携)

### (1) 授業の構想

#### ① 単元構想

##### 【小学校】

本単元は、仲間や幼稚園児とともに、てづくりおもちゃを作り、遊び方を工夫することをおしてよりよい「てづくりおもちゃフェスタ」にするにはどうしたらよいかを追究していく学習である。

単元を構想するにあたって、今年度は、幼稚園5歳児(年長児)との交流を繰り返す活動を仕組むこととした。具体的には、単元をおして子どもたちが自分達の遊びをつくるために、異年齢で構成されたグループの中で自分にできることを見付け(育てたい力①)、仲間や幼稚園児の互いの思いを伝え合いながら遊びを試したり、工夫したりし(育てたい力②)、ともに楽しい遊びをつくり上げる(育てたい力③)ことをめざした。このような姿を求めることが、保育と生活科でのめざす子ども像に近付くと考えたからである。

##### 【幼稚園】

この単元で交流するにあたり、小学生からの遊びの提案であっても、園内の遊びでの進め方や役割分担を同様にする事と、手作りおもちゃをつくった体験も生かされることで、主体的にかかわれるように考えた。また、ここに至る交流で慣れている1年生とのペアで活動することで、思いや考えも伝えやすくなると思った。1年生との交流でも、共通の目的に向かって協働して進めようとする事は、この時期の年長児の育ちにもそっていると捉えた。

#### ② 本単元で求める子どもの姿を実現するために(支援・援助)

##### 【小学校】

ア 幼稚園児とのグループ活動と小学生だけの話し合いを繰り返す単元構成を仕組む。そうすることで、1年生がグループの主体をなして活動を進めることができるようにする。

イ 気付きを伝え合う活動では、幼稚園児やお客さんの立場に立って問い返しをする。そうすることで、相手意識をもって活動を工夫することができるようにする。

ウ 遊びを工夫する活動では、毎時間の終末に、自らの活動を「遊びの楽しさ」「幼稚園児とのかかわり」の観点について3段階評価で振り返り、理由を伝え合うように促す。そうすることで、課題を明確にしたり、活動の達成感を味わったりできるようにする。

##### 【幼稚園】

エ 自分のしたいことや役割が見つけられるように、一緒に1年生の説明を聞いたり、尋ねたり、補足して説明をしたりする。

オ お互いの工夫に気づいたり、共通の目的をもって取り組んだりできるように、ペアグループの進み具合や進め方を聞きながら、相談にのり、支える。

カ 友達で進めていく姿を見守りながら、困っている時には相談にのり、1年生と進めていけるように促す。

### ③ 目標

#### 【小学校】

- 仲間や幼稚園児とともに身近な物を使った遊びを工夫する中で、遊びの面白さや自然の不思議さに気付いたり、身近な人とかかわることのよさや楽しさが分かったりすることができるようにする。
- 仲間や幼稚園児とともに楽しい遊びをつくることができた自分に気付き、これからの自分の遊びや生活を楽しくしようという気持ちをもつことができるようにする。

#### 【幼稚園】

- 小学生とかかわる中で、自分のしたいことや役割を見つけ一緒にしようとする。
- 自分の思いや考えを伝え、一緒に進めていくことを楽しむ。
- お互いの工夫に気づき、共通の目的をもって取り組む。

## (2) 子どもたちの姿

### 【小学校】 学びの実際 ※波線は育てたい3つの力が発揮された姿、下線は支援を表す

#### ① みんなが楽しい「フェスタ」にしようよ

単元の始めに、全校で開催された「オータムフェスタ（たてわり班での全校行事）」の振り返りを行った。子どもたちは、「お客さん役」と「お店屋さん役」のどちらも楽しかった思い出を語っていた。その中で、「お客さんで回ったときに負けてくやしかったからもう一回チャレンジしたい」と発言をした子どもがいた。その発言をきっかけに「他の店も回りたい」「6年生がやっていたお店屋さんの仕事をやりたい」と、新たな活動への思いがつながり、自分たちだけで、もう一度フェスタを開くこととした。そして、フェスタの内容を考える中で、「楽しいフェスタにしたい」と発言した子どもがいたため、誰が楽しいフェスタならよいか全体に問うた。【支援イ】すると、「来てくれたお客さん」「遊びを仕切ってお店屋さん」「フェスタに参加するみんな」と、お客さんもお店屋さんもみんな楽しめるフェスタをつくるという、めあてをもつことができた。

#### ② ちゃんと伝わったかな

てづくりおもちゃを使ってフェスタを開くことが決まった後、「みんなが楽しめるおもちゃフェスタにするには、もっと人数を増やした方がいい」という発言が出た。そこで、学級で話し合い、夏と一緒に沢遊びを行った、幼稚園5歳児（年長児）を誘いに行った。幼稚園で自分たちがつくるおもちゃや遊び方を伝えた後、学級に戻った際に、気付きを伝え合う時間を設けた。【支援ア】気付きの一部を以下に示す。

- T おもちゃづくりを星組さん（5歳児）も楽しみにしてくれていたね。  
C うん。一緒におもちゃづくりの相談ができたよ。  
C 先生、私は伝えるのは半分くらいしかできなかったよ。  
C ぼくも、頑張って説明したけど、伝わったかどうかわからない。  
T 次の時間、一緒におもちゃづくりできそう？  
C ちょっと不安だな。  
C じゃあさ、作り方を本でもう一回調べて、すぐに一緒に作れるように準備しておこうよ。（育てたい力①）



本で調べる子どもたち

このように、1年生だけで活動を振り返ることで、グループの主体であるという意識をもち、次時の活動の見通しをもつことができた。

### ③ 困ったことがあったよ

小学生と幼稚園児との遊びづくりの次の時間に、1年生だけで活動を振り返る時間を設け、自らの活動を「遊びの楽しさ」「幼稚園児とのかかわり」の観点について3段階評価を行うよう促した。【支援ウ】すると、「遊びの楽しさ」については、多くの児童が3だったことに対し、「幼稚園児とのかかわり」については2や1がとても多いことが分かった。そこで理由を詳しく問うと、「星組さんに『やめて』って言ったのにやめてくれなくてつりざおが、からまっちゃった」「ペットボトルを準備してくれてたけど私が思った物じゃなくて困った」など、幼稚園児との思いのずれを感じていることが分かった。そこで、次は、はどのようなことに気を付けるとよいか全体に問いかけると、「星組さんが思っていることをちゃんと聞く」「自分が思っていることが分かってきているか確認する」（育てたい力②）など、互いの思いを伝え合うことの大切さに気付くことができた。

### ④ 遊びが楽しくなったね

- 幼 ぼくのペットボトルロケット、遠くまで飛ぶようになったよ。  
幼 すごく飛んだね。  
幼 大きいロケットだとどうかな。やってみようよ。  
小 じゃあ、どこまで飛んだか分かるように、得点（目盛り）を付けようか。  
幼 うん。  
小 わかった。得点の最後はゴールにしよう。段ボールから横に出たら、アウト（0点）ね。  
幼 ぼくのロケットで試してみるよ。  
幼 やった。300点までいったよ。



得点（目盛り）を付ける子どもたち

これは、幼稚園児との遊びづくり3回目（最終）の時のグループでのやりとりである。幼稚園児との遊びづくりと1年生だけでの振り返りを繰り返したことで、単元の後半には、お互いが協力して遊びをつくり上げることができた。（育てたい力③）

### 【幼稚園】

#### ① 自分達には何ができるかな？考えてみよう！

- 小 先生、どうやったらうまく説明できるかな？  
T 説明してみて、分からないことはないか幼稚園の人に聞いてみたら？  
小 分からないことありますか？  
幼 写真じゃあよく分からないから、見本を見せて欲しい。  
T 次は見本をつくっておいたらいいね。  
小 このグループは飛ぶロケットをつくります。ペットボトルに模様も描くよ。  
幼 ロケットなら幼稚園祭りでつくったよ。ペットボトルはツルツルして描きにくいよ。  
幼 紙とかキラキラとか貼ったらいいんじゃない。  
T それじゃあ幼稚園にあるものをもっていったら？  
他に使えるようなものも探して、用意しようか。  
幼 そうしよう。



園でつくったロケット

- T 1年生にどんなおもちゃをつくるのかを教えてもらったね。星組さんも一緒につくろうっていったね。みんなもできることがたくさんありそうだね。必要なものを考えて持って行ってみようよ。何が必要かな？

- 幼 釣りをするっていったから、クリップがいるよ。  
幼 ひこうきをとばすんだって。つくり方の本を持って行こう。  
幼 先生、箱がいるんだよ。ペットボトルのキャップも持って行く！  
幼 飾りもつけるって言ってたから、キラキラがいる！



必要なものを考えて入れたかご

### 【考察】

- 園児は小学生から言葉と写真で提案された遊びを、興味をもちより知ろうとして「見本を見せて欲しい」と言っている。園で自分達で考えた遊びを進めるのと同様に提案された遊びでも「やってみよう」という意欲が感じられる。
- 小学生の説明を聞き、自分達のこれまでの遊び体験とつなげ、自分なりの気づきややってみたいアイデアを具体的に伝えようとしている。
- することのイメージがもてると、小学生に教わる、手伝うという意識だけではなく、自分達も一緒にするという気持ちももっており、材料や道具を自分達で用意しようとする意欲につながっている。

### ②どれぐらいにしようか？

T 何から始める？  
小 まず、穴をあける。  
T どれぐらいがいいかね？星組さんにも聞いてみたら？  
小 どれぐらいにしようか？  
小 大きいのがいい？小さいのがいい？  
幼 大きいの！  
小 小さいのもおもしろそうだよ。  
幼 小さくしてもいいけど、入らんといけん。  
小 そうじゃね。じゃあ、ふつうは？  
幼 ふつう、いいね。  
小 じゃあ、大きいのと小さいのを書くから、その間で切ろうか？  
幼 うん。そうしよう。



思いを伝え合う子どもたち

### 【考察】

- 保育者からの声かけもヒントにしてかかわろうとする  
始めは小学生も星組の子どもたちもどうしたらいいのだろうと困った様子だった。そこで、子どもたち同士のかかわりのきっかけになればと思い、こちらから小学生に話しかけた。すると、小学生の方から、「どれぐらいにしようか？」と声をかけ始める。「どれぐらい」ではわかりにくいと感じたA君は、「大きいのがいい？小さいのがいい？」と具体的に聞いていた。小学生なりに、星組さんにわかるようにするには、どう声をかけたらいいのかを考えている姿が見られた。
- お互いに納得できるように話し合おうとする  
それを聞いて、大きい方がいいと答える星組さん。それに対して自分たちの意見も星組さんが納得できるような言い方で伝えようとする小学生。星組さんも、小学生の思いをただ聞くだけでなく、思いを聞いてから自分なりに考え、またそのことに対しての思いを伝えている姿が見られた。お互いに思いを伝え、それを聞いて、お互いにより結果となるように進めていくことが、何度か繰り返してかかわるうちに子どもたちの関係の中でできていったのだなと感じた。

### (3) 授業・保育の考察

第2次の終末に行った、「おもちゃフェスタ」では、幼稚園児・小学生のお互いが楽しみながら取り組む姿を多く見る事ができた。1年生の振り返りからも、遊びをつくり上げた満足感や充実感が伝わる気付きを見取ることができた。このような子どもの姿からも、保育・生活科でめざす子どもの姿に近付くことができたと考える。その際、幼稚園と小学校との間で綿密な情報交換をし、お互いのねらいの共有化しておくことが大切であると感じた。

単元を終えた後の具体的な考察を以下に示す。

【小学校】

- 2～3人で組んだので、人任せにはできない、自分達が進めていかななくてはと主体的に取り組むことができていた。
- 生活科の授業の中で交流も行うことができたので、無理のない交流ができた。

【幼稚園】

- 継続した人とのかかわりで、安心して取り組むことができた。
- 小学校だけの時間、幼稚園だけの時間をとることができたので、子どもたちが次にこうしようとか見通しをもって交流の時間を迎えることができた。

【全体を通して】

- 教師がどの子どもたちにもかかわっていくことで、子どもたちの姿を共有し、同じ視線に立って交流にのぞむことができた。
- 同じペアでしていったこと、1グループの人数が5～6人だったことで、子どもたちが何らかの役割をもって繰り返し取り組むことができた。
- 1年生も年長児も、11月の下旬という時期がかかわりをもったり、一緒にしたりすることに対して抵抗なくできるように育てていたため、交流が有意義なものになったと考える。
- つけていきたい力と、その時期の子どもたちの力量を見ていって、やりかたの工夫をしていく必要がある。小学生が提案したことでも、関心をもって取り組むことができたのは、この時期だからだと感じた。また、園児は普段の遊びの中で培った力を、いつもの仲間の前だけでなく、小学生が相手でも発揮することができた。1学期では難しかっただろう。
- 1学期ならば、7月ぐらいに親しくなれるように交流を入れていけるのではないかなと思う。

今回交流を行った事で、以上のような考察をすることができた。指導助言の先生方からも、「お客さんとしていくのではなく、お互いに学びのある交流となる事が、お互いの子どもたちの成長につながる」という助言を頂いた。今後は、年間を通して幼稚園・小学校のお互いにとってよりよい学びをつくり上げられるようなカリキュラムの作成をしていきたい。